みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

『土方久功日記』と，もう一つのフィールド「ノート」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 久夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009325

第Ⅱ部

附　論

『土方久功日記』と，もう一つのフィールド「ノート」

清水　久夫
埼玉大学・法政大学・跡見学園女子大学非常勤講師

はじめに
『日記』の記述について
もう一つの「ノート」と『日記』の関係
『日記』と原稿の関係
おわりに
追記

はじめに

土方久功が残した『土方久功日記』（以下『日記』と略す）123 冊のうち，1929 年から 42 年にかけての南洋群島滞在中の日記は，神話，伝説，社会組織，出来事などを詳細に記したフィールドノートである[1)]。この南洋群島滞在中の『日記』を読むと，ところどころに「ノート」，「Note」という語が見られる。また，Note の略と考えられる N1. N2. などもしばしば見られる。これらのことから，「ノート」の存在が推測される。また，『日記』を調べると，その「ノート」は，『日記』と密接な関係を持つフィールドノートであることがわかる。

小論では，まずはじめに『日記』および「ノート」がどのように記述されたものであるかを述べ，ついで『日記』と「ノート」の関係について述べたい。『日記』および「ノート」の資料としての性格，および『日記』との関係を明らかにすることにより，『土方久功日記』は，研究資料としてより有効に利用できるものと考える。

『日記』の記述について

「ノート」についてふれる前に，『日記』の記述について述べたい。

久功は，旅行やフィールド調査等に赴く際，『日記』を携行していなかった。いくつか例をあげると以下のようである。

パラオへ来てまだ間もない頃，久功は，昭和 4 年（1929）4 月 14 日から 26 日まで，パラオ本島（バベルダオブ島）を旅行したが，『日記』を携行していなかったと考えられ，旅行を終えコロールの自宅へ戻ってから，旅行中の出来事を『日記』に記した。そのため，4 月 16 日から 26 日までの『日記』は，通常の『日記』の間に分割して記されている[2)]。

この間の事情は，本島巡りから帰って 3 日目の 4 月 29 日の『日記』からうかがわれる。

晩ハ十時迄本嶌メグリノ日記ヲツケテ，戸ヲシメテ今日コソ早寝ト思ッテ居ルトコロヘ，杉浦大工サンガ平嶌サンノ所ヘ行ッテ帰リダトテ，自分デ彫ッタ達磨トスケッチブックヲモッテ来ル。

久功は，本島の旅から戻ってきてから，毎晩のように，本島旅行中のことを『日記』に書いていたのであろう。

昭和 4 年（1929 年）11 月，久功はパラオ本島北部のガラルドにある公学校で彫刻を教えていたが，22 日・23 日，1 泊でアコール，コンレイに調査に行った。この調査には，トカイ，コーデップ等島民 4 人が加わり，コンレイ，ガツメル，カベイなど，周辺にある石製遺物を調べた。ここでは，21 日の記の次に，「二十四日記ス」とあり，22 日の調査内容が記され，25 日の記事のあとに，23 日の調査行程と調査内容が記されている。さらに，26 日，27 日の記事のあとまで，報告内容が記されている。書かれている内容は，質量ともにかなりのものがあり，記憶によるものとは考えられない。ここでも，調査の場には，『日記』を持参せず，帰宅後，現場で書き留めた「ノート」をもとに，何日にもわたって『日記』に書いたと推測される。

次の土・日曜日，11 月 30 日・12 月 1 日には，ほぼ同じ顔ぶれで，カヌー二艘でガラスマオへ行き，再び石製遺物の調査をした。その記録は，調査から戻った後の 12 月 1 日～ 3 日の『日記』の間に分割されて記されている。これも，久功が調査のさい，『日記』を持ち歩かなかったためであろう。調査には『日記』以外の「ノート」を持参していたと考えられる。

サタワル島滞在中，昭和 11 年（1936 年）のことであるが，久功は近くにある無人島プケーノ島へ行く舟があったので，その舟に同乗し，6 月 4 日から約 2 週間，プケーノ島に滞在した。『日記』には，6 月 3 日の記事の次に，16 日の日付が唐突に現れ，

四日ノ日ニ Pigölö ニ行ク舟ガアッタノデ，Poūpï モツレテ一緒ニ Pigölö ニ行キ，今日帰ッテ来タ所ダ。

と記されるのを見る。そして，プケーノ島および往復の航路での出来事は，18 日までの『日記』の中に分割されて記されている。日付の並びを見ると，

6 月 3 日→ 16 日→ 4 日→ 17 日→ 5 日→ 18 日→ 6 日→ 7 日→ 8 日→ 9 日→ 10 日→ 11 日→ 12 日→ 13 日→ 14 日→ 15 日→ 19 日

となっている。サタワル島に戻ってから，3 日程かかって，プケーノ島の滞在記を『日記』に書いたのである。

プケーノ島滞在中の出来事は克明に記され，しかも文章量が多い。これだけのものを

記憶のみに頼って書くことは不可能で，「ノート」などを持って行って，無人島滞在中はそれに記し，帰島後「ノート」をもとに『日記』を書いたのであろう。

調査や旅行で家を離れた時以外でも，久功は何日分かまとめて『日記』を書くことがあった。いくつか例を示すと次のようである。

昭和5年（1930年）9月19日，パラオ本島の北にある島，カヤンガル滞在中の『日記』には，次のように記されている。

> 暫ラクチットモ日記ヲツケナイ。海ハシケテ居ル。佐藤君ガ居ルノデ，島民達ハ恐ガッテ日曜日ニ寄リ集マル事モシナイ。……

確かに，この前一週間程，『日記』には，日付と天気以外ほとんど何も書かれていない。しかも，『日記』原本を見ると，筆跡から，まとめて一週間分書いたであろうと推測される。

サタワル島へ渡ってからであるが，毎日『日記』を書かなかったため，日にちを間違えることがあった。昭和8年（1933）10月16日の『日記』には，次のように記されている。

> ドコデドウ間違ッタノカ，二日ダケ日記ノ方ガ多過ギルノデ――ト云フノガ，一昨日カロリン丸ガ来テ，ソレガ十四日ダッタノデアル。

昭和9年（1934）12月14日の次の日の『日記』には，下のように記されている。

> 何処デ間違ッタカ，今日ハ十六日ラシク，朝十時頃，突然国光丸ガヤッテ来タ。

『日記』を毎日書いていれば，このようなことが起きることはなかろう。

神話，伝説の採集についてはどうだろうか。

昭和5年（1930）2月13日の晩，久功はマザラグアズ爺さんから出身地ウルボサンの話を聞いた。この日の『日記』には，次のように書かれている。

> 晩，maθharang-aθ 爺サンニ来テ貰ッテ，ウルボサンノ話ヲ聞ク。maθharang-aθ ハ今ハ年トッテ耳ガキコヘナイガ，ウルボサンノ出デ，ウルボサンニ就テハ随一ノ物識リデアル。

そして，その後に，マザラグアズから聞いた，ウルボサンノ縁起物語が記されてい

る[3)]。

17日には，再び，午から，マザラグアズに来てもらって話を聞いた。その後に，マザラグアズから聞いた神話が『日記』に書かれている[4)]。

3月17日にマザラグアズから聞いた神話，伝説はいくつかあったようで，18日の『日記』には，オコンランガルの話が，20日の『日記』には，デルコールバイとアルコールバイの話，21日の『日記』には，ア・イガスの二人の娘の話[5)]が書かれている。さらに22日の『日記』には，ガルスールの女酋長の話[6)]が書かれている。26日の『日記』には，タガデッキ（カワセミ）占いの話が記され，27日の『日記』には，ガルトック・イ・アカライの話が記されている。

つまり，久功は，17日の午から長時間にわたって聞いた7つの伝説等を同日の『日記』から27日までの『日記』に，分割して書き記しているのである。

昭和4年（1929）10月2日，久功のところへ，ア・イバドールが来た。『日記』には，次のように書かれている。」

> 夕方，ア・イバドールガ来ル。ビールヲヤリ飯ヲ一緒ニ食ッテ，色ンナ話ヲキク。色ンナ話ハアトデ書ク事ニスル。

翌日，久功は昌南倶楽部での講習生の展覧会の準備をし，4日には学校で，支庁長等も出席して講習修了式，5日には講習生の作品展があり，7日には次の勤務先であるパラオ本島の北端に近いガクラオへ移るなど，多忙を極めた。新しい勤務地でも，講習の準備や講習開始直後の雑用であいかわらず多忙であった。

結局のところ，約束通りにア・イバドールから聞いた話を『日記』に書いたのは，10月16日以降になってからであった。16日の『日記』には，ア・イバドールの話として，日輪模様とヘボロックの話の2つの短い話が記されている。これもア・イバドールから話を聞いたときは，「ノート」に記し，その2週間後，「ノート」をもとに『日記』に書いたのであろう。

もう一つの「ノート」と『日記』の関係

南洋群島滞在中の『日記』のなかから，「ノート」，「Note」，「N1」，「N2」などと記されているところを一覧表にした。

パラオへ渡った半年後の10月から昭和16年（1941）までの間，74か所ある。この一覧表から分かるのは，

① 「ノート」はN1からN8まで8冊あったこと。

② 「N1. 39」と記されているのが，「ノート1の39頁」であることを意味するとすれば，「ノート」は200頁近くあり，恐らくは『日記』と同様，大学ノートと考えられること[7)]。

③ 「天気モ悪イシ，ノートヲ大分怠ケタノデ，家ニ居テ昼寝シ，ノートヲツケル」（昭和5年（1930）7月14日），「ペリリューデトッタノート整理」（昭和5年（1930）7月30日）。「家ニ居テ『ノート』ノ整理」（昭和14年（1939）2月16日）とあるように，「ノート」は単にメモが記されているだけでなく，そのメモをもとに，「ノート」に整理されている。したがって，「是レニハ〔N1. 190〕ニアル伝説ガアルノデアル」（昭和5年（1930）12月8日）とあるように，「ノート」には，伝説も書かれていること。

④ 昭和14年（1939）10月にソンソル島を訪れたとき，「皆バラバラニソレゾレノ仕事。北村君ハ人頭税集メ，私ハ『ノート』取リ。」[8)] とあるように，調査の際，「ノート」を携行し，書き取っていること[9)]。

これらからわかるように，「ノート」は，現場でのメモを記すだけでなく，それを整理したものも書かれていた。つまり，久功の，「ノート」には，メモと整理された記録が混在していたと考えられる。

では，「ノート」と『日記』との関係はどうであろうか

ペリリュー滞在中の昭和5年（1930）7月14日の夜，久功はイケレップの所に行き，話を聞いた。翌15日も，朝から再びイケレップの家へ行き，夜にもまた，彼の家へ行った。そのときは，ア・スペスーク，イライブークも同席し，彼等からも話を聞くことができた。

15日の，この記事の後には，イケレップの妻とイライブークの二人から採集した「オラカル神話」の一説が記されている。この神話の文末には，「N1. 50参照」と書かれている。これはおそらく，採集の場では「ノート」に書き取り，それをもとに『日記』に神話を書いたのであろう。17日の項にも，イケレップの妻から採集した「ミラヅ神話」の一説が記されているが，その文頭には，「N1. 39」と付されている。これも，おそらく，「ノート」N1に採集の場で聞き取ったことを書き取り，それをもとに『日記』に書いたのであろう。

久功がコロールに近い，パラオ本島南部にあるアイミリーキで調査をしていた昭和5年（1930）11月20日の『日記』に，次のような記述がある。

午後，バイノ絵ヲウツシ，Riroū ノ所ニテ話ヲキク。

この日の『日記』に，「Bittar abelū ノ堺」という伝承[10] が記されているが，その文末には，提供者であるリロウの名が記されている。そして，その『日記』の欄外には，「オケカエル〔N1. 129〕と書かれているのが見られる。これは，久功が「ノート」を持ってリロウのところへ行って話を聞き，そこで「ノート」をもとにして，『日記』に，「Bittar abelū ノ堺」という伝承を書いたのであろう。そして，『日記』をもとにして，原稿を書いたと考えられる。つまり，

「ノート」→『日記』→原稿

という過程が推測されるのである。

『日記』には，石製遺物や発掘など多くの調査について子細に記されている。既に述べたように，『日記』は現場で書かれたものではないが，多くは翌日あるいは数日以内に書かれているので，時間が経って書かれた報告書などの文章に比べ，はるかに臨場感があり，久功の興奮が伝わってくる。

『日記』と原稿の関係

前章で述べたように，久功の著書，論文等の原稿は，ほぼすべて『日記』をもとにして書かれたといえる。さらに，『日記』に収められた神話・伝説あるいは調査記録が，「ノート」のメモをもとに書かれたとみるならば，

「ノート」→『日記』→原稿

という過程が考えられる，と述べた。

ところが，それでは説明できないことがある。

『パラオの神話と伝説』[11] は，昭和 4 年から 6 年の間に蒐められたもので，これらは全部，久功が島民から直接聞き得たもののみ掲げたものである[12]。当初，同書に収められた神話，伝説は，全て『日記』に書かれているものと考えていたが，『日記』の翻刻をしながら両者を見比べてゆくと，全てが『日記』に書かれているのではないということがわかった。つまり，『パラオの神話と伝説』第 1 部では，9 話の神話が収められているが，その中で『日記』に神話の全部が書かれているのは 1 話のみで，7 話は，一部（異伝等）だけが書かれ，1 話は全く『日記』には見られない。同書第 2 部には 48 の伝説が掲載されているが，およそ 3 分の 1 にあたる 17 話が『日記』には見られない。

ここから，必ずしも

「ノート」→『日記』→原稿

とならず，

「ノート」→原稿

というように，「ノート」をもとに，直接，著書，論文の原稿を書いたであろうことが推

測される。「表」にもみられるように，「ノート」を整理した，という記述が『日記』に3か所見られるが[13]，恐らくは，原稿に書き写せる程度まで「ノート」に整えられたものもあったのであろう。

サタワル島滞在中の『日記』は，パラオ滞在中のものとやや異なっている。

『サテワヌ島の民話』[14]には，155の「民話」（ディティヌナップ Dittilap）が収載されているが，サタワル島滞在中の『日記』には，「民話」が全くみられないのである。これは，「ノート」から，『日記』を経ず，著書の原稿が書かれたとしか考えられない。これを裏付ける記述が『日記』に1か所見られる。

昭和7年（1932）9月22日の『日記』には，次のように書かれている。

> 証拠？　事実ノ前ニ証拠ガ何ニナル。Ibūmāi ハスッカリヨクナッタ。立派ナ証拠デハナイカ。
>
> Ibūmāi 物語リ。Note [(2)] [(3)] ニ書イタ沢山ノ Dittilap ノウチノ一番面白イモノヨリモ更ニ立派ナ物語リデハナイカ[15]。

これは，サトワル島の「民話」（ディッティヌナップ）が，Note の2と3に，多数書かれていることを示している。

既に述べたように，『日記』には，「民話」（Dittilap ディッティヌナップ）は全く記されていない。それは，採集した「民話」を「ノート」に書き記し，「ノート」に整理し，『日記』には書き写すことがなかったからである。サテワヌ島における民話採集は，極めて狭い地域で，限られた人数（島民300人に満たない）を対象としているため，移動することがほとんどなかったからであろうか。

おわりに

小論では，『日記』，「ノート」それぞれについて述べ，両者の関係について論じた。その結果，「ノート」は『日記』と同じように，貴重な資料であろうことがわかった。ことに，サテワヌ島の民話は，『日記』に全く見られず，すべて「ノート」に書かれていると考えられ，貴重であるといえよう。

しかし，この貴重な資料は，現存の確認ができない。だが，昭和35年（1970）頃には存在していたことがわかる。1970年1月に刊行された『日本美術』第63号に，「南洋島民の裸体周辺」[16]が掲載されたが，そのなかに，

> 僕は昔，パラオでこの乳房の型とその名称についてききただし，ノートした記憶があるが，今，そんな古いノートをひっくり返してみる根気がない。[17]

と書かれている。ここにみられる“ノート”は，これまでに取り上げてきた「ノート」と考えられる。この時には，「ノート」は，久功の手許にあったのである。

註

1）『土方久功日記』（以下『日記』と略す）Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，「序文」。
2）『日記』Ⅲ，昭和4年（1929）4月16日～26日）。4月16日以降の『日記』の日付を見ると，
4月16日→29日→17日→18日→19日→20日→21日→22日→23日→24日→25日→26日→27日→28日→5月1日
となっており，日付が一部前後しているだけでなく，4月30日の記が欠けている。
3）この伝説は，「オルワンガルの沈没」〈『土方久功著作集』（以下，『著作集』と略す）第3巻〉のオルワンガル伝説の異伝の1つとして82・83頁に収載されている。
4）この神話は，オルギースの話の一説として，『パラオの神話と伝説』〈『著作集』第3巻〉17・18頁に収載されている。
5）この伝説は，「ア・イガスの二人娘」と題され，『パラオの神話と伝説』〈『著作集』第3巻〉）158頁に収載されている。
6）この伝説は，「ガルスールの女酋長」と題され，『パラオの神話と伝説』〈『著作集』第3巻〉）127・128頁に収載されている。
7）南洋群島滞在中の『日記』は，ほとんど200頁前後で，日本から送られてきた大学ノートを使っていた。
8）『日記』昭和14年（1939）10月1日。
9）サタワル島から戻って，パラオに滞在中のことだったが，ペリリューを訪れた際，娘や若い女達から話をきこうと思ったら，「反対ニ『コロール』ノ歌ヲ教ヘテクレト云ッテ，ノートカラ歌ナドウツシテ一生懸命歌ッテ居ル。」つまり，久功の「ノート」には，コロールで採集したコロールの歌が書かれていたのである（『日記』昭和14年3月1日）。
10）「パラオの重要断片的地方史」（『著作集』第1巻）269頁収載。
11）1985年，大和書店より『パラオの神話伝説』と題され刊行される。『パラオの神話と伝説』と題され，『著作集』第3巻におさめられている。
12）同書，凡例。
13）①1930年7月30日，「ペリリューデトッタノートノ整理」，②同年12月6日，「終日雨止ムカトスレバ降リ，トヂコメラレテノートノ整理。」③1939年2月16日，「家ニ居テ「ノート」ノ整理」。
14）1953年，三省堂から『サテワヌ島民話』と題され刊行。『サテワヌ島の民話』と題され，『著作集』第5巻におさめられている。
15）「サトワヌ島の神憑り」（『著作集』第4巻）115頁では，「証拠？　事実の前に何の証拠か。イブマーイはすっかりよくなった。立派な証拠ではないか。ノートに書いた沢山のディッティヌナップ物語のなかの一番おもしろいものよりも更に立派な物語ではないか。」と書かれている。
16）後，『著作集』第6巻に，「南洋随想」のひとつとして収載。
17）『著作集』第6巻，426頁。

追記

小論成稿後，国立民族学博物館，「土方久功アーカイブ」の中に，「ノート」9 冊（資料番号 124 ～ 132）があるのがわかった。国立民族学博物館で閲覧したところ，小論で述べた「ノート」であることがわかった。また，「ノート」の内容は，小論で述べたこととほぼ間違いなく（小論では 8 冊としたが，実際には 9 冊あったが），『日記』と同様，貴重な資料であることも確認することができた。しかし，小論では，「ノート」の内容についてはこれ以上述べず，9 冊の「ノート」の詳しい内容紹介についての論稿は，後日を記したいと思う。

附表

No.	年	月 日	冊	内容	備考
1	1929年	10月15日	14冊	〔N1, 107〕	伝説
2		11月12日		〔N1, 1〕	神話
3		11月13日		〔N1, 107参照〕	伝説
4		12月 1 日		〔N2, 35, 37〕	
5		12月 4 日		〔N2. 52〕〔N1. 93参照〕	伝説
6		12月 8 日		〔N1. 70－74参照〕	伝説
7		12月16日	15冊	〔N1. 72参照〕	伝説
8	1930年	1 月16日		(N1. 7参照)	伝説
9		2 月 9 日		N1, 4参照	神話
10		2 月17日		〔N1. 109〕	伝説
11		3 月22日		〔N1. 33〕Note. 1. 1	神話
12		3 月22日		N1. 42参照	神話
13		4 月19日		夜，アイバドールヲ訪ネ，話ヲキク。(ノートニアリ)	
14		4 月20日		〔N1. 37参照〕	
15		4 月20日		〔N1. 34〕	
16		4 月20日		〔N1. 41〕	結婚制度
17		5 月 4 日		〔N2. 41〕	
18		5 月11日		〔N1. 109参照〕〔N1. 41〕	伝説
19		7 月10日		〔N1. 188ヲ見ヨ〕	
20		7 月12日		〔N1. 45参照〕	神話
21		7 月14日	16冊	ノートヲ大分怠ケタノデ，家ニ居テ昼寝シ，ノートヲツケル	
22		7 月15日		N1. 50参照	神話
23		7 月17日		N1. 39	神話
24		7 月18日		N1. 109	伝説
25		7 月21日		N1. 112	伝説
26		7 月21日		N1. 111	伝説
27		7 月21日		N1. 95	伝説
28		7 月24日		N1. 60	伝説
29		7 月29日		N1. 35	伝説
30		7 月30日		ペリリューデトッタノートノ整理	
31		8 月 1 日		N1. 97（カネクイノブルソヨコ）	伝説
32		8 月 4 日		N1. 83ヲ見ヨ	ルバク制度
33		8 月16日		N1. 106	神話
34		8 月16日		N1. 79	神話
35		10月16日		〔N1. 11参照〕	埋葬
36		11月 4 日		〔N1. 113〕	伝説
37		11月11日		村ニ行キ「ノート」ヲトッテクル	
38		11月20日		N1. 129	伝説

No.	年	月 日	冊	内容	備考
39		12月 6 日	17冊	終日雨止ムカトスレバ降リ，トヂコメラレテノートノ整理	
40		12月 8 日		是レニハ〔N1. 190〕ニアル伝説ガアルノデアル	伝説
41		12月10日		〔N1. 2〕	神話
42		12月10日		N1. 74	神話
43		12月21日		N1. 108 参考	神話
44		12月21日		N1. 113	神話
45	1931年	1 月13日		N1. 80 参照	部族組織
46		1 月13日		N1. 80 参照	部族組織
47		3 月15日		N1. 112	伝説
48		3 月15日		N1. 72	神々
49		4 月14日		〔N2. 38〕,〔14. 16〕,〔N1. 104〕	伝説
50		4 月18日	18冊	〔N2. 30〕	部族制度
51		4 月30日		〔N2. 16〕	伝説
52		6 月 3 日		杉浦君ガノートヲモッテ来テクレタガ,	ペリリュー
53	1932年	1 月 3 日		N4. 141	霊魂
54		6 月22日	19冊	〔N2. 116〕	酋長権
55		6 月26日		一体此ノ Fail ハ N2. 116 頁ニ記シタ様ニ	
56		9 月22日		Note(2)(3)ニ書イタ沢山ノ Dittillap ノウチノ一番面白イモノヨリモ	
57		12月24日	20冊	〔N3. 64〕	
58	1934年	12月21日	22冊	N6, 45　N5. 75	氏族制度
59	1938年	4 月 1 日	24冊	N3. 119	神々
60	1938年	4 月 1 日	24冊	N5, 75	
61	1939年	2 月16日	25冊	家ニ居テ「ノート」ノ整理	
62		9 月 2 日	26冊	〔N1. 147〕参照	
63		10月 1 日		北村君ハ人頭税集メ，私ハ「ノート」取リ	
64		10月 1 日		私ノ「ノート」ハホンノ部分的ナモノデアルガ,〔N6. 69〕以下ニ	
65		12月24日		今度ハ「ノート」ヲ見テ，書カレテ居ル「パラオ」ノ歌ヲ残ラズ歌ッタ	
66	1940年	1 月16日	27冊	石棺ニツイテハ Note ノ 7 ニ記シタ。	
67		3 月23日		夜十時半迄 note ヲ取リ，ソレカラ南海岸ニ行ク。	
68		4 月 7 日		Tehebeat ニ行ッテ Note ヲトリ，昼寝シ，食事シ，	
69		8 月13日		午後物陳ニ行キ，土器ノノート。	
70	1941年	1 月15日	28冊	a kim ノ面ヲ見ニ行ク。〔N8. 33 ニアリ〕	
71		1 月25日		出張ガ近イノデポツポツノートヤ本ヲカタヅケニカカル。	
72		2 月20日		Mar ガ Ngaḡiki ノ男ヲツレテ来タノデ，昼迄ノートスル。	
73		3 月 7 日		朝ノウチ日記，ノートノ整理。	
74		3 月12日		ノートノ整理。	